交遊抄

ジーンズ姿の師

大槻勝紀

二十数年前、大阪大医学部の研究室で、カッターシャツとジーンズ姿の彼が優しく出迎えてくれた。現在は大阪国際がんセンター研究所所長の辻本賀英さん。医学部の教授といえばワイシャツとネクタイに白衣と決まっていたが、ラフな服装で研究室をさっそうと歩く姿が格好良かった。

理学部出身の彼は研究一筋で、細胞が自ら死ぬ細胞死（アポトーシス）を抑制する遺伝子の発見者として既に世界的に知られていた。大阪医科大で解剖学を専門としていた私が研究に協力することになり、初対面。同年代だが、それ以来ひそかに「研究の師」と仰いでいる。

遺伝子学は当時から競争が最も激しい研究分野だ。未踏の領域を目指しライバルたちと一刻を争う身でありながら、彼は「研究にはエレガントさが大切」と繰り返し説いていた。追い詰められ困るのではなく、自由な発想のための余裕を持とう、という至言だろう。

解剖学の研究はどちらかといえば地味で根気がいる。世界から注目されるような成果は少なかったが、彼の助言を得ながら著名な学術雑誌に論文を発表することができ、研究生の人事交流といったお付き合いも続けさせてもらっている。お互い立場は変わったが、今も彼はジーンズがよく似合う。（おおつき・よしのり＝大阪医科大学学長）